

千里国際学園 中等部・高等部

新シリーズ「Authentic Opportunities 本物に触れる教育」

第1回 SISと言語

教頭 井藤 眞由美

ごあいさつ

今春より千里国際学園 (SIS) の教頭に就任しました井藤眞由美です。これまでも英語教員、そして入学センターの一員として、直接または間接的にアメリカ在住の方々や帰国された方々と多くの交流をさせていただいてきましたが、今後もう少し立場は違っていても入学関係、特に帰国生の受け入れとサポートには力を入れて取り組ませていただきたいと思います。前号で登場しました眞砂校長と力を合わせて、帰国生の持ち帰ってくれる輝きをますます光り輝かせることができる環境づくりに努めたく思います。よろしく願いいたします。

新シリーズ

INFOE 発行以来「世界は千里でひとつになる World comes together at Senri」というシリーズを22回に渡ってお届けしてきました。(バックナンバーはINFOEの、または本校のHPでごらんいただけます。) 2009年春、ここでひとつの区切りをつけ新シリーズをはじめることになりました。新シリーズのタイトルは「Authentic Opportunities 本物に触れる教育」です。「Authentic—本物の。真正の。偽物や複製でないこと。」

SISが提供している教育のユニークさを一言で表すならこのことばだと思います。表面的な知識を詰め込むよりも、本質を突き詰める。考える。本物の情報を手に入れ、本物の手段でそれを人に伝える。本物に触れ、本物を見る。本物の「人生に役立つ教育」。これらSISでの教育活動の特徴を、新シリーズでも色々な角度からお伝えさせていただきたいと思っています。では第一回目はSISの言語環境とAuthenticな語学教育についてお話しします。

SISと言語

SISの言語環境

幼稚園から12年生まであって英語で学習を行っている大阪インターナショナルスクール(OIS)と「Two schools together」のポリシーで日々の教育活動の多くを共有しているSIS。二つの学校が共存しているこの学園に一歩足を踏み入れたらそこはもはや日本ではありません。かといって、アメリカの

現地校とも何か違う・・・初めて学園を訪れてくださった方がよくこうおっしゃるのは、耳に入ってくることばが英語と日本語ちょうど半分ずつ位という独特の環境のせいでしょう。教職員や生徒たちの会話や校内放送。目にするものも、校内掲示物や配布レターなどの多くが2言語表記です。授業のことについては後ほど触れることにしまして、まずは授業以外の場面での生徒たちの日常の言語環境についてお話ししましょう。このようなバイリンガル環境の中で、生徒たちは状況に応じてごく自然に自分の使いやすいほうの言語を使っています。そのことが誰にとっても自然に受け入れられる環境です。帰国後しばらく地元の公立小学校に行ってから入学してきた中学生がこう言ってくれることがよくあります。「小学校の時、いつの間にか絶対学校で英語を口にしないように自分にすごく制限をかけてしまっていた、ということにSISに来てから気がついた。今はとっても楽。お友達と英語で話すときもあるし日本語で話すときもあって、自分が自分らしく自然でいられる。」こういう言葉を聞かせてもらって、心から「SISに来てくれてありがとう。よかった。」と思います。二つの言語世界を心に持つバイリンガルの子供たちが、帰国後も心に余計なストレスをもたず、のびのびと自分の中の輝く宝をたくさん見つけてくれることを願います。おもしろいのは一般生(日本の小学校からSIS中等部に、または日本の中学からSIS高等部に入学した生徒)でもOISの生徒やSISの帰国生徒と仲良くするうちにすっかり日常会話は英語が中心になってしまう生徒もいることです。日本にいながら言語力や生活パターンが「帰国生」のようになってしまうことがあり得るというのもSISらしいところだと思います。

授業での言語

授業という場面においては、言語の使用環境はかなりはっきり限定されます。Art, Music, PEの授業(これらはシェアードクラスといって、OISの生徒たちと一緒に授業を行います)と英語の授業では、基本的にすべてを英語で行います。そしてそれ以外の授業は日本語で行いますから、授業言語に関していえば生徒たちは二つの言語の切り替えを日々何度も行っている、いや、行わざるを得ない状況におかれています。「言